

小林秀雄著『本居宣長』: 二十二章主題(詠歌にあつては、『ことば(歌の實)第一なり』)の「關係論」的纏め。

①詠歌(物:場 C')②『ことば(歌の實)第一なり』(物:場 C')③今の人情(實の心)(物:場 C')④古の歌(物:場 C')⑤古の人の詠じたる歌(物:場 C')⑥古歌古書(物:場 C')⇒からの關係:①にあつては、②。③にしたがひて、いつはりかざりて〔即ち『面白くかざる』(歌の實)ゆへに、實(實の心:『歌をよまむと思ふ心』)をうしなふ事〕なりとも、随分④をまなび(歌の實)、⑤の如くに、よまむよまむと心がくれ(歌の實)ば、「⑦:その中におのづから、平生見聞する⑥に心が化せられる(歌の實)」(D1の至大化)⇒「⑧:古人のやうなる情態(情・思ふ心・實の心)」(⑦的概念F)⇒E:「⑧にも(⑥で)うつり化するもの(歌の實)也」『これ和歌の功德(歌の實)によりて、我性情(實の心)も、(⑥で)よく化する(歌の實)と云ふもの也』⑧への距離獲得:Eの至大化)⇒宣長『あしわけ小舟』(△梓):①②への適應正常。

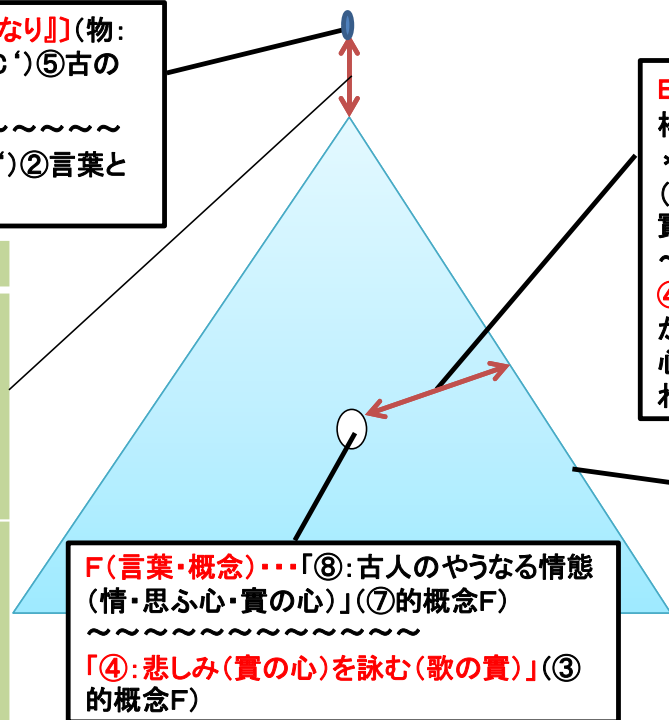
①情[心・思ふ心・實の心『歌をよまむと思ふ心』](物:場 C')②言葉といふ『手がかり』(歌の實)(物:場 C')⇒からの關係:『①は自然也』と言つただけでは足りない。『自然と求めずして在る心[情・思ふ心・實の心『歌をよまむと思ふ心』]は、そのままでは『心散亂して、妄念競ひおこる情態を抜けられるものではない。まだ『歌の實』といふ表現性を得ない『實の心(情・思ふ心・『歌をよまむと思ふ心』)の單なる事實性などは、敢へて『妄念』とか『散亂した心』とか呼ぶがよろしい、と⑤は言ふ。②がなければ、心は心で、どう始末のつけようもないものだ〔即ち『ことば(歌の實)第一なり』。』③:思ふ心[情・實の心『歌をよまむと思ふ心』]を『ほどよく言ふ(歌の實)』では足りない。一步すすめて、亂れる心[心散亂・妄念・思ふ心・情・實の心『歌をよまむと思ふ心』]を『しずむ』『すます』『定むる』『晴らす』(歌の實)と言ふべきだ⇒「④:悲しみ(實の心)を詠む(歌の實)」(③的概念F)⇒E:④とは、悲しみ(實の心)を晴らす(歌の實)事だ。悲しみ(實の心)が反省(歌の實)され、見定め(歌の實)なければ、悲しみ(實の心)は晴れまい。言葉の『手がかり』(歌の實)がなくて、どうしてそれが人間に出来よう」(④への距離獲得:Eの至大化)⇒⑤宣長『あしわけ小舟』(△梓):①②への適應正常。

(物:場 C')...①詠歌(物:場 C')②『ことば(歌の實)第一なり』(物:場 C')③今の人情(實の心)(物:場 C')④古の歌(物:場 C')⑤古の人の詠じたる歌(物:場 C')⑥古歌古書(物:場 C')
~~~~~  
①情[心・思ふ心・實の心『歌をよまむと思ふ心』](物:場 C')②言葉といふ『手がかり』(歌の實)(物:場 C')

からの關係(D1の至大化)

①にあつては、②。③にしたがひて、いつはりかざりて〔即ち『面白くかざる』(歌の實)ゆへに、實(實の心:『歌をよまむと思ふ心』)をうしなふ事〕なりとも、随分④をまなび(歌の實)、⑤の如くに、よまむよまむと心がくれ(歌の實)ば、「⑦:その中におのづから、平生見聞する⑥に心が化せられる(歌の實)」(D1の至大化)

②がなければ、心は心で、どう始末のつけようもないものだ〔即ち『ことば(歌の實)第一なり』。』③:思ふ心[情・實の心『歌をよまむと思ふ心』]を『ほどよく言ふ(歌の實)』では足りない。一步すすめて、亂れる心[心散亂・妄念・思ふ心・情・實の心『歌をよまむと思ふ心』]を『しずむ』『すます』『定むる』『晴らす』(歌の實)と言ふべきだ



E: [F(言葉・概念)との附き合ひ方・用法]...「So called」Fと(△梓)との距離獲得(Eの至大化)。

\*「『⑧にも(⑥で)うつり化するもの(歌の實)也』『これ和歌の功德(歌の實)によりて、我性情(實の心)も、(⑥で)よく化する(歌の實)と云ふもの也』⑧への距離獲得:Eの至大化)

④とは、悲しみ(實の心)を晴らす(歌の實)事だ。悲しみ(實の心)が反省(歌の實)され、見定め(歌の實)なければ、悲しみ(實の心)は晴れまい。言葉の『手がかり』(歌の實)がなくて、どうしてそれが人間に出来よう」(④への距離獲得:Eの至大化)

(△梓)宣長  
『あしわけ小舟』